令和２年度 フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流

澤口　真弓・田万　幸子・久川　浩太郎

筑波大学附属聴覚特別支援学校では、平成 15 年にフランス国立パリ聾学校と姉妹校協定を締結して以来、オンライン交流や相互訪問交流などで交流を重ねてきた。令和元年度はオンライン交流を３回実施し、本校からパリ聾学校へ訪問交流を行った。令和２年度は、パリ聾学校の生徒が本校に訪問する予定になっていたが新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、延期となった。そこで、昨年度に引き続き高等部普通科生徒はオンライン交流を２回実施した。オンライン交流の準備・実施・振り返り活動を通して、生徒の交流相手国に関する興味関心が高まったり、コミュニケーションや英語の学習に対する意欲が向上したりすることが示され、国際交流におけるオンライン交流の重要性が示唆された。

キー・ワード：国際交流　オンライン交流　コミュニケーション　異文化体験　異文化理解

1　はじめに

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）とフランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成 15 年の姉妹校協定の締結から始まり、オンライン交流は平成 25 年より行っている。平成 25 年のオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかったため、平成 28 年からは放課後の時間を利用してオンライン交流を行った。その結果、異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された。令和元年度は３回オンライン交流を実施し、その後パリ聾学校を訪問した。渡仏前にオンライン交流を行うことで、パリ聾学校の生徒とのコミュニケーションに慣れたり、訪問時に行うプレゼンテーションの工夫の参考になったりした（久川・澤口,2020）。

令和２年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため本校が４月から３ヶ月間の休校、放課後の活動が可能になったのは７月以降となった。９月はパリ聾学校の学年の進級時期だったため、11 月以降にオンライン交流を２回実施した。それぞれ希望者を募り、第１回 15 名、第２回 14 名が参加した。

フランスと日本の時差は８時間（冬時間）であるため、第１回、第２回は日本時間の 16:30（フランスは 8:30 時）から、１時間程度交流を行った。

2　オンライン交流の実践

令和２年度のオンライン交流は、オンライン会議アプリ Zoom（以下、Zoom）を使用して、２学期に２回（11 月 20 日、12 月 18 日）実施した。

本年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止による本校の４月～６月の臨時休校、パリ聾学校の夏季休暇等が重なり、オンライン交流が２学期の後半となった。

第１回の交流では、パリ聾学校の生徒と初めてコミュニケーションを図り、お互いを知ることを目的にしたため事前準備を２回とした。第２回の交流では、第１回の交流で発表できなかったグループが前回の反省をもとにプレゼンテーションを作成し直し、発表、交流を行った。

(1) 第１回オンライン交流事前準備

① 準備第１回（11 月 10 日 12:50～13:15）

オンライン交流参加希望者を募ったところ、高等部１年生 13 名、２年生１名、３年生１名となった。３年生は令和元年 12 月にパリ聾学校の訪問交流に参加した生徒であったため、高校２年生と高校３年生はアドバイスをする立場になってもらった。

第１回の交流に向けて、動画を使用ながらフランス手話の挨拶“Merci”、”Bonjour”等を練習した。

また高等部１年生の参加者 13 名は３グループに分かれ、それぞれ、日本の「映画・アニメ」「サムライ・ゲーム・アイドル」「食文化」のプレゼンテーションを作ることにした。次回の準備（11 月 17 日）までに、タブレット端末で使用する学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を用いてグループでスライド資料を作成することとした。昨年度の反省を受けて、文字の色は白、サイズは 42pt 程度で太文字、スライドの背景は黒、１枚のスライドにつき英文は２行程度に統一した。

② 準備第２回（11 月 17 日 12:50～13:15）

それぞれのグループが作成したスライド資料をプロジェクターに投影し、参加者同士でスライド資料の見え方の確認をした。前回の準備で確認したフォントや背景の色の統一ができていないグループがあったため、スライドの修正を行うように指示した。また、Google 翻訳などの翻訳アプリを利用している生徒も多く、単語の意味がわからないまま難しい単語をスライドの中に使用していたため、各自で交流前に確認するよう指示した。

オンライン交流参加者が作成したスライドは、各グループ 40 枚以上となっていた。

(2) 第１回オンライン交流実践（11 月 20 日）

① 機材や教室内配置

オンライン交流は、スクリーンとプロジェクターが設置されている教室で行った。タブレット端末１台とパリ聾学校のタブレット端末をインターネットに接続して、Zoom のミーティング機能を使用した。パリ聾学校の生徒の様子をプロジェクターでスクリーンに投影し、参加者全員でパリ聾学校の生徒の様子を確認できるようにした（Fig.1）。

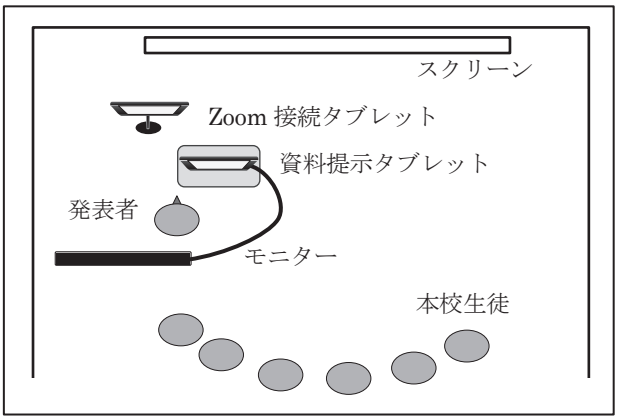

Fig.1　教室内の配置

スライド資料は、資料提示タブレットからテレビモニターに表示させ、モニターの前で生徒がプレゼンテーションや会話を行った。モニターに表示したスライドを Zoom のミーティング機能で読み込むため、写真資料等はモニターが反射して見えにくい時があった。その際は、資料提示タブレットを直接 Zoom 接続タブレットに近づけて、パリ聾学校の生徒がスライド画面を見やすいように工夫をした。

第１回の交流では、本校生徒が２グループ、パリ聾学校の生徒が２グループ、それぞれ発表を行った。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、パリ聾学校教員は透明マスクを着用し、パリ聾学校の生徒は全員マスクを着用していた。本校教員はマウスシールドを着用し、生徒は全員マスクを着用した。本校生徒は、発表時にはマウスシールドを使用するようにした。

最初に、本校生徒からフランス手話での挨拶を交えながら、「日本の食文化と食文化のマナー」について発表をした。このグループはお椀とお箸を持参して、スライド発表後には、和食の食事のマナーを実演した。

次にパリ聾学校の生徒が「パリの食文化」についてスライドを用いて発表を行った。今回は Zoom を使用したので、パリ聾学校教員からパリ聾学校で２回線を使用する提案があった。本校、パリ聾学校教員とパリ聾学校生徒発表の３グループの表示となったことで、発表者がスライドを直接表示しながら

も、パリ聾学校の教員の回線を使って手話で話しかけることが可能となった。スライドを直接提示することで、スライドの見やすさは増したが、一方で、パリ聾学校の生徒の手話の様子は見えにくくなり、提示方法に課題が見られた（Fig.2）。

Fig.2　パリ聾学校が２回線使用している様子

本校生徒がフランスの食文化に興味をもち、紙にペンで書いて、パリ聾学校の生徒に質問する姿が見られた。食文化の話題が終了した時点で、パリ聾学校生徒は Zoom 会議から退出し、本校とパリ聾学校教員の２回線に戻した。

次に本校生徒は「サムライ・ゲーム・アイドル」に関するスライドを発表した。特にゲームでは、パリ聾学校の生徒は「スーパーマリオ」「ポケモン」を知っていたらしく、生徒同士で質問をし合うきっかけとなった。本校生徒 が“What games are popular in France?”と質問したところ、パリ聾学校の生徒が「スーパーマリオ」を画面越しに指差しして、コミュニケーションを図った。

最後に、パリ聾学校の生徒が「パリの伝言ゲーム」を発表した。手書きの文字が反転してしまい、内容が読み取りづらくなったしまった。本校教員がパリ聾学校教員に状況を口頭で報告したが、改善することができず、パリ聾学校の生徒がゲームを実演してくれることになった。そのゲームの実演を見て、本校生徒は具体的に理解することができた。

その後、交流終了予定時刻になり、第１回の交流を終えた。事前に用意した「日本の映画・アニメ」の発表ができなかったため、第２回に持ち越すことにした。

(3) 第２回オンライン交流事前準備

①　パリ聾学校との連絡

11 月 20 日に交流した際、「次回は 12 月 10 日に交流しましょう」とパリ聾学校の教員と口頭で確認したが、パリの新型コロナウイルス感染者数の増加や社会状況により 12 月 18 日にオンライン交流を延期することになった。フランスでは 10 月 30 日から２回目のロックダウンが実施されていた。夜間の外出禁止、映画館・博物館の営業停止等の措置がなされていたが、大学以外の教育機関はこの対象外となっていた。

②　準備第１回（12 月 15 日 12:50～13:15）

「日本の映画・アニメ」の発表者は前回の反省を受けて、可能な限り文章を短くし、パリ聾学校の生徒にわかりやすく表示するようにした。「日本の映画・アニメ」の解説をする英文が長く、「パリ聾学校の生徒が飽きてしまうかもしれない」と気付き、「日本の映画・アニメ」の画像があり、短い解説が載っているスライド、映画に関する細かな情報が載っているスライドの二つに分けた。50 枚以上のスライドを作成していたので、それを二つに分けることで、見やすさを重視した。

(4) 第２回オンライン交流（12 月 18 日）

第２回の交流では、本校生徒１グループが発表を行った。前回の反省を受けて、Zoom の開始時刻は 16:00（フランスは 8:00）に設定した。

Zoom 接続後、パリ聾学校教員からパリ聾学校の現状の説明があった。フランス省庁からの要請を受けて、パリ聾学校では火曜日・金曜日の生徒の登校は家庭の判断に委ねられていること、いつもなら８時過ぎには生徒が登校し始めているが、今日はまだ誰も登校しておらず、何人登校するかわからない旨の説明があった。その後、パリ聾学校教員はタブレットを持ち運び、中庭や寄宿舎・食堂等パリ聾学校の校舎を案内してくれた。

次に、パリ聾学校教員は“Bonjour”、“Merci”、

“ça va?”とフランス手話の基本の挨拶を教えてくれた。音声とともに教えてくれたが、パリ聾学校の教員はマスクをしたままフランス手話をした。“Can you understand the difference between Bonjour and Merci?”と本校生徒に質問したので、本校生徒は困って、“No”と口々に答えた。パリ聾学校教員はマスクを外し、ゆっくりはっきりと口を動かし“Bonjour”、“Merci”とフランス手話をした。その後、本校生徒も何人かわかった様子で表情が明るくなった。パリ聾学校教員は、“Bonjour”、“Merci”のフランス手話は同じ動きをするので口形や動かし方が大事である、と説明をしてくれた。また、マスク着用の際のコミュニケーションの困難さを説明してくれた（Fig.3）。その後、パリ聾学校の生徒が登校したため、フランス手話はパリ聾学校の生徒が教えてくれた。“I love it.”、“I love you.”などのフランス手話の表現を知ることができた。

Fig.3 フランス手話を紹介している様子

次に本校生徒が「日本の映画・アニメ」のスライドを説明した後、自由に会話することになった。“What do you do in winter vacation?”“When will your winter vacation start?”など、休暇に関する会話が筆談や身振り手振りで行われ、交流は終了した。

交流実施後、反省会を行う予定であったが、本年度は交流の延期などもあり、反省会の場を設けることはできなかった。

3　調査結果

オンライン交流実施後、選択式の質問紙調査を実施した。質問は10項目で、それぞれの質問項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの五件法で回答を求めた。各質問項目の回答を、「とてもそう思う＝５点」、「そう思う＝４点」、「どちらでもない＝３点」、「そう思わない＝２点」、「全くそう思わない＝１点」として、２回の交流の平均を集計した（Table1）。

Table1　質問紙調査結果

質問項目	平均
①発表では交流相手にわかるように工夫した。	3.8
②準備や練習の時間がもっとほしかった。	3.7
③交流時間（約１時間）は短かった。	4.7
④今回の交流を通して、英語に興味をもった。	4.3
⑤今回の交流を通して、英語をもっと学習したいと思った。	4.3
⑥今回の交流を通して、フランスの手話に興味をもった。	4.7
⑦今回の交流を通して、フランスや交流相手に興味をもった。	4.7
⑧今後も国際交流に取り組んでみたい。	4.8
⑨オンライン交流ではなく、実際に現地に行きたいと感じた。	4.9
⑩今回の交流は、社会人になったときに役に立つと思う。	4.6

選択式の質問紙調査の結果、今後も国際交流に取り組みたいと答える生徒が最も多く、昨年度に引き続き定期的にオンライン交流を実施することは必要であることがわかった。

英語に関する項目では、第１回の交流より英語に対する興味や学習意欲の向上がみられ、本オンライン交流が、英語の学習に対して効果があると考えられる。スライド資料の作成やパリ聾学校の生徒との

やり取りにおいても英語を用いており、オンライン交流の内容によって、英語に対する興味や意欲が向上することが示唆された。

質問紙調査では、選択式の質問の他に自由記述も行った。質問項目は、①今回のオンライン交流で印象に残ったこと、②今回のオンライン交流でうまくいったこと、③今回のオンライン交流でうまくいかなかったこと、④次回のオンライン交流で取り組みたいこととした。

①オンライン交流で印象に残ったことの記述では、Zoom を通してパリ聾学校の内部や中庭の紹介があり、実際にパリに行っている気持ちになれた。コロナ対策で、パリ聾学校の生徒は基本的にマスクをつけ、先生はフェイスシールドをつけているとわかった。フランス手話は口形がわからないとかなり理解が難しいとわかったと記述した生徒が多かった。フランスの新型コロナウイルス感染症の状況を直接教えてもらうことで、海外の様子をより現実的に捉えることができたようだ。また、パリ聾学校の教員がフランス手話を教えてくれたことで、フランス手話への理解、興味が深まり、コミュニケーション方法の工夫や意欲向上につながったと考えられる。

②オンライン交流でうまくいったことの記述では、今まで習った英語で話すことができた。友達と協力し合って、英文で質問を作り出すことができたと英語に関する記述が多くあった。第１回の交流よりも、第２回の交流の方が、英文を簡潔にするなど表現方法に工夫が見られた。

③今回のオンライン交流でうまくいかなかったことでは、スライドの紹介ではタブレットを直接画面に近づけた方が見やすかった。説明したいことがあってもできなかった。質問に対して、英語ですぐに答えることができなかったと記述が多かった。見やすさに関しては、Zoom にログインする回線を増やし、スライドを直接提示する等改善方法を検討していきたい。オンライン交流を通して、日頃の学習状況を振り返り、英語学習に意欲向上につながったと考えられた。

④次回のオンライン交流で取り組みたいことの記述では、ジェスチャーゲームをやってみたい。オンラインでも楽しめるゲームをやってみたい。ゲーム型の交流に関する記述が多くみられた。アプリの特性を生かしたゲームを考案するなど生徒が主体的に楽しめる交流を検討していきたい。

4　まとめと今後の展望

オンライン交流の様子や質問紙調査の結果、国際交流や交流相手国に対する興味関心が高まり、英語の学習やコミュニケーションに関する意欲が向上したりすることが示唆され、オンライン交流の意義が改めて確認された。本年度の交流から Zoom を使用することで、スライドの見やすさに改善が見られた。スライドを直接提示することにより、他の画面で手話を行うことが可能になり、チャット機能も使用することができるようになり、今後の交流内容の幅は広がりつつある。

フランスと日本の時差があり、年に何度も交流することが容易ではないので、事前準備を繰り返し行い、パリ聾学校の生徒と本校生徒が主体的に対話できる交流を実施していきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を得ている。

〔参考文献〕

久川浩太郎・澤口真弓（2020）令和元年度フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流.筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要,42,81-85.

伊藤詩織・松本邦子・久川浩太郎（2017）フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流.筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要,39,88-92.